

組織開発から切り込むカリキュラム・マネジメントの事例研究

～小中一貫と教科等横断を縦横の軸にして～

横浜国立大学教職大学院 教育学研究科高度教職実践専攻
古矢 穰士

1. はじめに

カリキュラム・マネジメント(以下「CM」と表記)について、「どこから手をつけ何をしたらよいのか、また何が正解なのかかわからない」とは、ある学校の教務主任の声である。教師の個業を中心とする校内の組織体制によって、総合的・横断的な視点に立って資質・能力の育成を考えることが難しかったり、学区内の小中学校での意思疎通が十分とはいえず、学校段階間の相互理解が思うように進まなかったりする学校がある。CMを推進させるための手立てをより多くの学校で共有することが今まさに求められているといえる。

2. 課題解決方法

先行研究等を参考にCM組織開発モデルを考案し、このモデルを活用して、研究・研修会の充実など、CMに関する課題解決に取り組んだ(図1)。

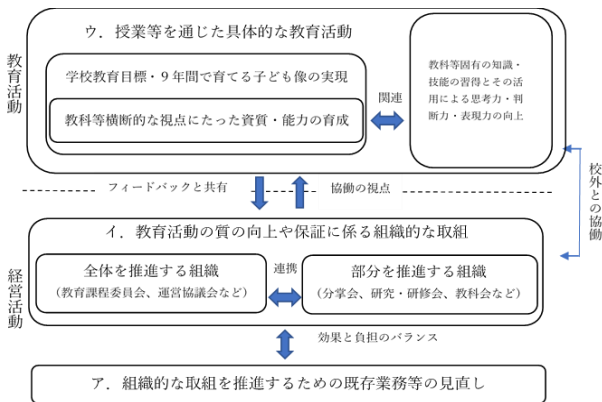


図1 CM組織開発モデル

また教科等横断的な視点にたった資質・能力の育成を小中一貫して考えられるように、縦横のイメージを示した(図2)。

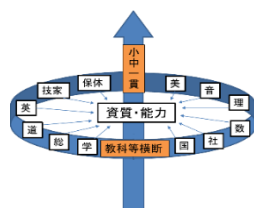


図2 縦横のイメージ

3. 結果と考察

本研究は、約2年半にわたるA中学校におけるCMを組織開発から切り込む形で進め、H31年度の「教育課程研修会」「小中合同研修会」「校内授業研究会」の取組を中心にして、「①子どもの学びのマネジメント」と「②教員に与える影響」の2つの視点に焦点化し、分析および考察を行ってきた。①異校種・他教科・外部とのつながりをもつことで、教員の視野が広がる、②教科内や校内だけに閉じない形で、授業改善の意識や意欲の向上が図られる、③教科等横断的な視点に立った資質・能力の成長指標を作ったことで、異校種・他教科の教員が育てたい子どもの姿に対する教育活動の評価を共有し、協働の場面を生み出すことができる、④授業アンケートを子ども自身の学びを振り返る形式に変えたことで、目指す学びを教員と生徒が共有できる、⑤「教育課程研修会」と「小中合同研修会」と「校内授業研究会」を一体的に捉えることで、「小中一貫」と「教科等横断」を縦横の軸にしたCMの充実のための基盤が作られる、などいくつかの成果を見出すことができた。また、研究・研修会を実施するために必要な時間を新たに捻出し、取組に対する教職員の合意形成を図るには、先行して既存の業務整理等を組織的に行うことが有効であることもわかった。

4. おわりに

今後も継続的なアンケート調査やインタビュー調査、詳細な観察を通じ、本研究で触れてきたような組織的な取組が、生徒や教員にさらにどのような影響を与えていくのかを追っていくことが大切である。学習指導要領が改訂され、Society5.0社会の到来が徐々に現実となりつつある今、学校と実社会のつながりを捉えたCMについて、研究と実践の両面からの挑戦的な取組が一層望まれていることは確かなことである。